

た。私は片川氏の形見に何かないかと考え使用していた石けん箱を形見としていたのですが、引揚船に乗船する前「決められた物以外は船に持ち込むことを禁ず」で、取り上げられてしまいました。石けん箱一個でも片川氏の遺族の方にお渡しすることが出来れば、それだけでも私の精一杯の行為を認めて許して貰えたらうに。生きて帰って来た私ほどの顔下げて片川氏の遺族宅を訪れられよう。いろいろ考えあぐんだ末、訪ねて行かないことにしました。今だに申し訳ないような、濟まない気持ちで一杯です。あの抑留当時を思い出す度に、ゾーッとします。二度とあのような苦しみは味わいたくありません。今後、私たちの子供、孫、ひ孫、玄孫に至るまで、あの生地獄の味は絶対に味あわせたくありません、本当に懲り懲りです。

生き地獄のシベリア強制労働

大阪府 近藤 恒雄

国境の街、夜の満州里を失望と不安を満載した列車がシベリア鉄道との接点カリムスカヤの西隣、トリムスカヤに着いたのが二十年十月二十八日夜、日本へ帰れるとわずかな希望も雪の中に降ろされて無惨にも消えた。

以来三年を越える私の強制労働生活が始まったのである。忘れもしない、十二月のある日曜日が私の最初の労働であった。

それは、見たことも聞いたこともない二人挽きの大きな鋸を使って雪中伐採であった。膝まである雪の中、両方から懸命に松の木を切る。ようやく一本切り倒して、痛い腰を雪の上に伸ばし空を見上げた時、辛さからか、望郷からか涙がにじんだ十六歳であった。また作業中、寒さのため靴下二枚、防寒靴下を履いても足

指先が疼いてくる。凍傷にかかる寸前とわかるが、あえて手当てはしない。少し位の凍傷ならかかって入室（病室）した方が体が休める。思惑通り一週間程休めた。極寒期の一週間休みは生きのびるのに大いにプラスになった。

食事当番は初め交代制でやっていたが、そのうち希望者が多くなつた。朝晩暗く、見えないのを良い事に、スープの実や飯を外套のポケットに盗み入れる。もちろんスープや味噌汁の中に汚い手を突っ込んでである。

ある時ある人のポケットを調べたところ、メシやらスープの実が一杯入っていて、上官にこっぴどく撲られた。不運としか言いようがないが、特殊な作業者を除いて、一度や二度はほとんどの人が覚えがあつたのではないだろうか。あさましい限りではあるが、当時の状況では、誠に致し方のないことであつたと思う。

一月、二月になると栄養失調の度が進み、毎日の伐採場行きはさながら奴隷の行列を見るようで、防寒服、防寒靴、雪道をうつむきノロノロと重い足どりで歩く。木の枝が落ちてゐる「越えナ・イカンナー」と思ひ

ながらも足が上がらず、つまづいて転ぶ。一度転ぶと、列に追い付くのに苦勞する。その頃には、ほとんどの人が十キロ位は体重が減つていた。風呂場で見える友の尻はくぼみ、皮膚はカサカサで黒ずみ、ガイコツか幽霊を見るようで生地獄の容姿であつた。シラミ、南京虫、酷寒の重労働、食べ物は乏しく何でも前後の見境なく食べた。但し余りの寒さのため、食べられそうな物は余り見当たらなかつた。ネズミの丸焼き、松皮の虫、野草等が栄養源であつた。

二十一年春、クラスナヤレーチカ、ペトロシーを経て二十二年春頃キルガに移動、駅残留組と別れ、十一キロのラーゲルを過ぎ二十三キロの収容所に入った。ここでも伐採、枝焼き、材木のトラック積み込み、道路作り、馬そり、山の労働は、何でも人一倍やつた。若かつたせいもあつて疲労の回復は早いし、また若い少年故に、みんなに助けて貰つたことも多々あつた。二十三キロといえば、当時唯一の栄養源「松の実」がある。伐採場に着くや、松の大木を見上げて実を探す。ソ連の歩哨が見ないうちに、必死で切り倒し何はとも

あれ松の実を取る。松笠は直径七、八センチ、長さ十五センチ位ではなかっただろうか、それをスープで煮て、日曜日は、朝から晩まで寝そべって食べるのだが、初めは固い殻で舌が傷だらけ、味噌汁（スープ）がしみて痛く、味も何も味わえなかったが、慣れてくるとソ連人並に口にほうり込んで、舌の先で殻だけパッと出せるようになったものである。

二十三年春、キルガ本隊に合流、希望してトラックから材木の積み降ろし作業にまわしてもらい、当時二十三、四歳の若手連中と、花形作業に夜昼なく、精一杯働いた。この頃には、精神的、肉体的にも少し余裕ができ、朝夕にはバーベル揚げ等をやって体を鍛えた。あの頃は、東山さんの腕っ節の強いのを見て負けじと頑張ったものだ。

十一キロの山に居た時、キルガから加藤・黒岩・川上等がサフキン大尉同行で川鱒とりに上がってきた。私も同行して川に入ったが、余りの冷たさに、もの二分ももたなかった。だがみんな一日中、川に入っているのである。三十キロ位上流まで行って翌日帰りに

十一キロで一泊、翌朝魚を確かめると一匹もない。「イタチだろう」ということだったが、今考えると頭の黒いイタチだったかも。

私は、キルガ本隊を中心に二十三キロ、十一キロ、バブストアーと転々と出張労働。二十三年十月、バブストアー農場に居た時、サフキン大尉がダモイの命令を持ってきた。夢のようにしか思っていなかった日本帰国が現実となったあの時、嬉しさと同時に「まだこのまま居残りたい」と複雑な感情になったことも事実である。

三年の抑留中、多くのソ連人を知った中に、初めの山から最後のキルガまでいたアバタのコールケンという兵士がいた。最初は悪の代表みたいな男であったが、キルガで別れる時は大変よくしてくれ、別れを惜しんで涙さえ浮かべてくれた。終戦と同時に帰国していれば、悲劇もなかったものを。

二十三キロ、十一キロの山。キルガ、またシベリアの各地で栄養失調、強制労働による事故、あるいはならかによる銃殺等で、大切な命を落とし、肉親の待

つ故国へ帰れなかつた多くの同胞に心から冥福を祈ると共に、元気に活躍されている方々の益々の御健斗と御多幸を祈念いたします。

満州からシベリアへ

島根県 塚田信雄

大沢大尉を長とする千名の作業大隊が編成され、昭和二十年九月中旬北孫呉を出発した。入ソ後は次から次へとコルホーズ、またはソホーズの馬鈴薯の掘取りをしながら前進する。食糧の支給はなく、わずかの岩塩で主食は芋だけの生活を送り、疲れ果てた体で十月中旬炭鉱の街ライチハに着く。

そこで、作業大隊は編成替えて二つに分けられ、半分の五百名は（アラチカ地区）へ先に出発して行った。残りの五百名の松沢隊は、露店掘りの炭坑を右に見ながらライチハの街を通り過ぎて駅から貨車に乗せられる。

長い道中を労働しながら歩かせられて、ようやく汽車に乗ることができた。そして、シベリア本線でウラジオ経由でダモイするかと思うとうれしくなり、みんなも急に元気になる。

ところが何時間も走らぬうちに降ろされたのである。そこはシベリア本線のブレーヤでライチハは支線であった。私たちは本線に乗りかえるためにどこかで待機するであろうと思つて歩くが、先頭はとまらずにどこまでも歩かせられる。そのうち、右手に五百メートル以上の大きい河が見え、引き込み線が道路と並行して走っており、線路は何年も使用した跡はなく、枕木は腐りレールは赤錆になっていた。

ブレーヤの駅から十キロ以上歩いたのであろうか、間もなく左手に小高い崩れかけた山があらわれ、採石場らしきところが見えるではないか、ここへ来てやっと気がつき「コリヤ大変だ。石切り場で働かせるために連れてきたのだ」と全員愕然とした。

何年働かされるか、ついに帰国する夢は消えて、一生涯強制労働をさせられるかもしれないと、暗澹たる